



sarada kineu

サラダ記念日

tawana machi

俵万智

ミ、リオン驚異のセラ

万葉集も
なんのその、
与謝野晶子
以来の
革命的情熱
歌人誕生

歌の本
万智がれて、
万智ちゃん

河出書房新社
定価九八〇円

日本図書館協会選定図書
全国学校図書館協議会選定図書

佐々木幸綱氏による跋文

俵万智さんとはじめて会ったのは、早稲田の第一文学部の教室だった。彼女が大
学三年のときだったかと思う。たまたま、週一回の私の授業をとっていた。そんな
あるとき、夏休みの前だったか後だったか記憶は定かではないが、彼女から手紙を
もらった。簡単な自己紹介、授業の感想、日々の生活のこと等々があった、最後に
「私も短歌をつくってみたいんですが……」といった意味のことが書かれてあった。

筆無精の私は、返事を書こうと思いつつ、ついつい返事が遅れた。教室には来て
いるはずだが、二〇〇人近くいる大教室ではだれが手紙をくれた俵万智さんなのか、
まったく見当もつかない。こちらからは、話しかけようがないのだ。そうこうして
一、二週間が過ぎるうちに、続けざまに彼女から何通もの手紙がきた。私などでも、
ときどきちょっとおかしな女性から連日の手紙をもらうことがある。最初は、また
それかなと思ったりもした。が、字はきれいだし、ウィットが利いている文章も魅
力的だ。文章に独特のリズムと張りがあるのもいい。書きたいことがたくさんある、
根っから書くことが好きな少女らしい。私は、とにかく五七五七七の文章を書いて
教室に持っていらっしやい、と返事を書いた。

はじめて会ったのは、そんな返事を書いた翌週の教室であった。

予想とはずいぶん違った女子学生が教壇にやってきた。現在、高校の教員である
彼女にこんなことを言うと怒られるかもしれないが、ぱっと見たとき、私は高校生
かと思った。小柄なだけではなく、仕草や目の動かし方などが、どこことなく高校生
めいていた。彼女はそのとき「生まれてはじめての短歌です」と言って、そう、三
〇首くらい短歌を持ってきたと思う。原稿用紙にきれいに清書されていた。

それからほとんど毎週、じつにたくさん短歌をつくって持ってきた。あふれる
ように、という表現ではまだるっこしい、噴き出すように短歌ができるようであっ
た。おそらくは彼女の内部に眠っていた自らの音楽が、短歌形式に出会うことで目
覚め、始動し、鳴動しはじめたのであった。自身の内部の音楽を発見した、と言い
換えてもいい。休火山が活火山に変わる初期の状態はそんなだろうと思わせるほど、

烈しく歌が噴き出してくるようであった。

やがて「心の花」という私などのいる短歌雑誌の会員となった俵万智さんは、ここで若い仲間の何人かと出会った。彼女は彼らと競い合うことで、みるみるうちにそのもって生まれた音楽の旋律を鮮明にしていったのだった。本歌集中の作品は、こうして生まれたのである。

一昨年の角川短歌賞で「野球ゲーム」が次席になり、次いで「八月の朝」が昨年の第三二回角川短歌賞受賞作となって、俵万智の歌は歌壇の話題をさらった。さらに、新人類とかライト・ヴァースとか、ちょうど頃合の流行語等と出会うという巡り合わせもあって、話題の輪は歌壇の外側へも広がっていった。

では、俵万智の歌のどこが、新人の名にふさわしい新しさなのか。

まず、口語定型の文体の新しさ。昭和初期と戦後を二つのピークとして、口語短歌が盛んに行われたことがあった。だから口語短歌そのものは新しくもなんともないのだが、彼女の短歌は口語でありながら、そのほとんどがきちっと五七五七七の定型リズムに乗っている。字余り、字足らずがほとんどない。

かつての口語短歌は破調に寛容であり過ぎた。具体的に言えば、語尾の処理がうまくゆかなかったのだった。俵万智の歌は、会話体を導入し、文末に助動詞が来る度合を減らす工夫をほどこしてある。このあたりがかつてのそれと一味違うのである。

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまったいいの

今日風呂が休みだったというようなことを話していた毎日

「俺は別にいいよ」って何がいいんだかわからないままうなずいている

愛人でいいのとうたう歌手がいて言ってくれるじゃないのと思う

どれもびたり五七五七七で書かれている。もう一点は、失恋の歌としての新しさである。今あげた四首を見てもあきらかだが、石川啄木の歌に代表されるような、明治末年来ずっと長いあいだ短歌のトレード・マークだった暗さとしめっぽさは完全に無縁な失恋の歌である。

ここでの男と女の関係は、思わせぶりの陰影などをとっばらってしまったそれだ。どこまでもからりとして、明るい。作中人物は、最初っから深刻さが似合わないキャラクターとして登場している。煩悶とか懊惱とか、失恋につきものだった心の情況からまったく自由である。

俵万智の歌の愛読者に若い女性が多いのは、そんなところに、これまでの文学作品や歌詞のたぐいには見られなかった現代の女性の気持ちのほんとうの部分が、ふつと露出しているからなのだろう。

砂浜のランチついに手つかずの卵サンドが気になっている

「平凡な女でいろよ」激辛のスナック菓子を食べながら聞く

日常のディテイルが急に角ばって突出する。日常的価値感がそのまま男と女の場面にぬつと顔を出す。これまで心理の陰影というヴェールに隠して、見ないふりをしてきた裸の心の在り様が、ちらっとむき出しになっているこのあたりが、たぶん失恋の短歌として新しいのである。

歌集誕生に立ち会ったものの一人として、この歌集が、多くのよい読者と出会うよう祈りつつ、跋を記した。

原作・脚色・主演・演出 俵万智、の一人芝居——それがこの歌集かと思う。ご覧くださったかたに心から感謝しつつ、私はまだ舞台の上にいる自分を発見する。幕はおりていないのだ。生きることがうたうことだから。うたうことが生きることだから。きのうの私の物語は、あしたの私の物語へとうたいついでゆかれねばならないだろう。それが一冊をまとめおえた、いまの私の思いである。

「野球ゲーム」で第三十一回角川短歌賞の次席となり、「八月の朝」で第三十二回の同賞を受賞した。恵まれたスタートだったと思う。歌をつくりはじめてから約四年。その間の作品のなかから四三〇余首を選び、この集におさめた。年齢でいえば二十歳のおわりから二十四歳のいまに至るまで、ということになる。

私と歌との出会いは、すなわち佐佐木幸綱氏との出会いであった。早稲田の文学部で、そのエネルギーな講義を聴き、魅了される。歌人だということを知る。

歌集を読む。とりこになる。そして私は歌をつくりはじめた。

もし、佐佐木幸綱に出会わなかったら。もし、佐佐木幸綱が歌人でなかったら。もし……それにこたえる言葉を、私は知らない。考えるのがこわい。そしてそのこわさを感じる時、あらためて「出会い」というものの大きさを思うのである。

出会いは偶然だった。が、いま私が歌をつくりつづけていることは、偶然ではない。表現手段として、私は歌を選んでいく。惚れてしまったのだ、三十一文字に。

一三〇〇年間受けつがれてきた、五七五七七という魔法の杖。定型のリズムを得た言葉たちは、生き生きと泳ぎだし、不思議な光を放つ。その瞬間が、好きなのだ。

短いということは、表現にとってマイナスだろうか？ そうは思わない。自分のなかの無駄なごちゃごちゃを切り捨て、表現のせい肉をそぎおとしてゆく。そして最後に残った何かを、定型という網でつかまえるのだ。

切り捨ててゆく緊張感。あるいは切りとってくる充実感。それが短歌の魅力だと私は思っている。

「あなたの歌がいいから、本にしたい」。そういつて長田洋一氏は、突然私のまえにあらわれた——河出書房新社「文藝」編集者。以前「万智さんには、いつも幸運の風が吹いてくるね」と言った人がいる。幸運の大風が吹いてきたのだ。私の歌集を出してやろうだなんて、そんな良心的なこと？ をして大丈夫なんだろうか。この会社、つぶれるんじゃないだろうか——よけいなお世話かもしれないが、そう思った。が、もちろん思っただけで、私はありがたくこの風に身をまかせることにした。あとは私のよけいな心配が、まさによけいな心配になってくれることを、祈るばかりである。

私の一人芝居に舞台をあたえてくださった長田洋一氏。舞台監督をつとめてくださった北羊館の中川昭氏。舞台美術の菊地信義氏。佐佐木幸綱先生からは跋文を、荒川洋治・高橋源一郎・小林恭二の各氏からは推薦の言葉を、祝福の花束としていただいた。写真は田村邦男氏のお手をわずらわせた。

みな、私の歌をあたたく見守ってきてくださったかたがたである。そして、いつも励ましの声援を送ってくれた歌誌「心の花」の兄貴たち。伊藤一彦・小紋潤……名前をあげたらきりが無い。すべての人に、心からお礼を申しあげたい。

一人芝居が、一人では決して打てないということを、身にしみて感じている。ありがとを言わなくてはならない人たちの顔を、ひとりひとり思い浮かべていたら、涙がこぼれそうになった。私にとっていちばんの幸運の風は、ほんとうに素晴らしい、たくさんの人たちにめぐり会い、見守られてきたことだ。そしてこの歌集をきっかけに、今度は私の作品たちが素敵な出会いをしてくれることを、心から願っている。

角川短歌賞の受賞の言葉のなかに「さて、これからのかこれまでなのか」と書いた。一冊をまとめおえて、いよいよその思いは深い。いつも「これから」の私でいられるよう、がんばっていききたいと思う。

料理が好きで海が好きで手紙が好き。人いちばいホームシックのくせに、東京でひとり暮らし。おっちょこちょいで泣き虫で、なんにでもびっくりしてしまう。なんてことない二十四歳。なんてことない毎日。なにかから、一首でもいい歌をつくっていききたい。それはすなわち、一所懸命生きていききたいということだ。

生きることがうたうことだから。うたうことが生きることだから。

一九八七年三月

俵 万智

著者略歴

俵万智 (たわら・まち)

一九六二年十二月三十一日、大阪生れ。

一九八一年、早稲田大学第一文学部入学。在学中、歌人佐佐木幸綱氏と出会い作歌をはじめ。

一九八六年、作品「八月の朝」五十首で第三十二回角川短歌賞を受賞。

サラダ記念日 俵万智歌集

一九八七年五月八日 初版 発行

一九八七年十月五日 二五五版発行

著者——俵 万智

発行者——清水 勝

発行所——株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三三―二 〒151

振替 東京〇―一〇八〇二

電話 (〇三) 四〇四―二〇一(営業)

(〇三) 四〇四―八六一(編集)

編集協力——株式会社 北羊館

印刷——暁印刷株式会社 製本——小泉製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替えいたしません

© 1987 Printed in Japan ISBN4-309-00470-9